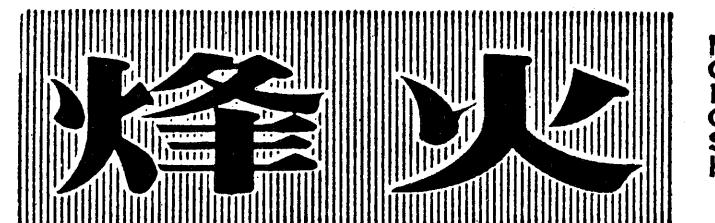


☆帝国主義の侵略反革命、社会帝国主義の武装反革命を粉碎し、世界革命戦争一世界プロ独を組織する世界単一党を国際階級闘争の最前線に組織せよ！

1981年
9月15日
第339号
編集発行人 高木一夫
一部 200円

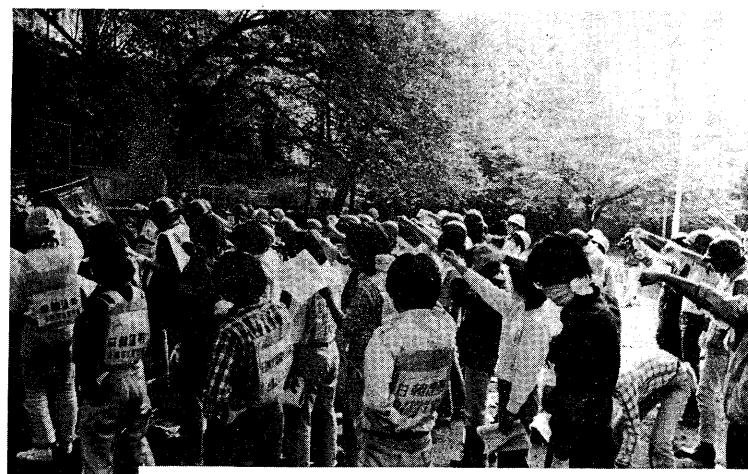


共産主義者同盟（全国委員会）

- 大阪戦旗社 大淀区本庄東2丁目2の31
とみやビル15号 Tel(06) 371-3706
- 郵便振替 大阪—63333 高木一夫
- 銀行口座 第一勧銀 515-1058150 高木一夫

国際階級闘争の前進にこたえ、日帝の戦争・ファシズム準備と対決し

10・21	10・11
（時間・場所未定）	二期着工阻止・空港廃港 主催・三里塚第一公園 主催▼三里塚芝山連合空港反対同盟
三里塚全国総決起闘争 全国総決起闘争	



日韓定期閣僚会議粉碎に決起
(9月9日 三河台公園)

ソウル入りする外相園田ら▶

秋期政治闘争に決起せよ！

八年前半期、国際階級闘争は新たな激動を開始した。ここ数ヶ月の国際階級闘争の新たなねりは、はつきりとそれを物語っている。イギリス全土にわたる連日の都市暴動とサッチャー政権の強権的弾圧、フランスでのミッテランの大統領選の勝利、北欧・ベネルクス三国をはじめとするヨーロッパ全土での反核運動の高まり、イランでの内戦的状況への突入と南朝鮮における反帝民族解放闘争の新たな前進、そしてボーランドの党大会と続発するストライキ。これらは帝国主義・社会帝国主義の根深い政治的経済的危機のあらわれをしめすものである。かかる危機を前に米帝リーガンを先頭にして帝国主義諸国ブルジョアジーは、戦争とファシズム準備の道をひた走り、支配の危機をのりきらんとしている。またソ連社帝は帝国主義間強盗抗争への介入と、

全世界の新たな階級激動

国際階級闘争への抑圧をよりいっそうつよめている。

全世界で噴出する人民のたたかいは、米ソを軸とした帝国主義間抗争がますます帝・社帝の危機を進行せしめ、そしてこの危機ののりきりが国内労働者人民への収奪と抑圧、第三世界諸国への新植民地支配によつてはかられることにたいする反撃である。同時にわれわれはこの国際階級闘争のうねりのなかに新しい性格が刻印されていることをはつきりとみてとらねばならない。

これらの闘争は中国＝ベトナム戦争以降の国際共産主義運動の混迷のなかで、この情況をつきやぶりつつおしとどめようもなく湧きおこっているのである。かかる国際階

全国のたたかう労働者人民諸君！ 秋期闘争にたちあがろう。激化する日帝の諸攻撃＝安保、日韓、改憲、産報化に広範な人民の反撃を組織しよう。全世界のたたかう人民にあくなき連帯の声を組織しよう。人民の内部で、戦争問題、政府権力問題、労働運動をめぐる社共への批判を強化し、排外主義を暴露しよう。階級的労働運動の再建に向かおう。大衆的な政治共闘を形成しよう。広範な人民の政治的統一戦線の建設を呼びかけよう。大衆の中から大衆の中へ！人民の大海上に革命のうねりを起こそう！

いる。われわれはこれに抗し、第三世界で前進する反帝民族解放闘争、社帝支配下でばつ発する階級闘争、帝国主義足下の反帝闘争を单一の世界階級闘争として結びつけ、これをレーニン主義にもとづく世界社会主義の路線と世界党建設の大道に統合していかねばならない。

このような局面のなかで、中ソ論争以降、国際共産主義運動の大分裂の一方の旗頭であった中国共産党は、その位置を急速に喪失し路線的破壊と組織的分散を露呈しはじめている。六月二九日、中国共産党は「建国以来の党的若干の歴史的問題についての決議」を採択し、文化大革命を公然と「災難」であつたと全否定し、また毛沢東思想の根幹をなす「プロレタリア独裁下の継続革命の理論」にたいしても否定見解をなげかけた。同時にかつて中国共産党が限界をもちながらも、やいといつ国際共産主義運動の総路線をめぐる闘争として開始した中ソ論争を、つぎのようによくわめて清算的に総括したのである。「ソ連の指導者が中ソ論争を挑発して、両党間の原則上の論争を国家間の紛争に変え、中国に政治上、経済上、軍事上大きな圧力をかけてきたため、われわれはソ連の大国外交主義に反対する正義の闘争をすすめないわけにはいかなくなつた」(「…決議」)。ここには中ソ論争を総路線闘争として位置づけるというわれわれは中国共産党の歴史的破壊をのりこえ、社会帝国主義との全面的分岐をもつて国際階級闘争をうちきたえ、その單一の司令部=世界党建設に勝利しなければならない。

全世界のプロレタリアートは、帝国主義打倒・社会帝国主義打倒・中国路線止揚の旗をかかげ、自国の階級闘争を世界革命の不可欠の一部として大胆におしすすめねばならない。この旗印こそ現代過渡期世界におけるレーニン主義党建設の核心である。

帝国主義諸国の政治危機

国際階級闘争の大きな前進をかちとる条件

はいま全世界で成熟しつつある。

帝国主義諸国においてはいちようにインフレと不況の共存、失業の増大、政治支配の危機がブルジョアジーの足もとにおしよせ、広範な人民の決起が現出している。

十一%の失業率を数えるイギリスはその典型であり、不況と失業の波は大衆の流動と政治的分解をよびおこし、それは労働党の「左傾化」と分裂にその一端を表現した。しかし人民の憤激はこれにとどまらず、北アイルランドのたたかいの影響をも受け、失業と生活苦にたいする都市下層労働者の決起にはじまる連日の都市暴動として噴出した。移民を中心

にたいし、白人の民族排外主義者による「有色人種に少ない働き口をわたすな」というスローガンをかかげた武力襲撃が組織され、サッチャー政権はこれと連合して警察力を投入してこれを鎮圧するとともに、みずから危機を人民の排外主義的組織化によってのりきらうとしたのである。労働党・共産党は下層労働者の決起を切り立てることで、英帝・サッチャーの弾圧に手をかした。彼らはプロレタリア階級がみずから下層の同胞を組織しないときには、ブルジョアジーによってファンズムの巨大な温床が育成されることをみないのだ。

フランスにおいては、失業とインフレにたいする人民の憤激は、社会民主主義者ミッテランの大統領選勝利をもたらした。ミッテランは「産業の国有化」「社会的公正の拡大」を旗印に、大衆の現状への不満を景気刺激策によって解決せんとしている。しかしそれは、独占資本の存在に一指も触れることなく、ブルジョアジーとの「国民融和」を前提としたものであり、ミッテランは開始された大衆の流動をプロレタリアートの眞の勝利の道へ率引するのではなく、逆にこれをブルジョアジーとの和解の道へひきずりこんでいくであろう。

さらにNATO加盟諸国を中心にして全西歐的規模で、米帝・レーガンの対ソ対決戦略と結合したNATOの軍備増強と、新型核ミサイル配備にたいする反対闘争が拡大している。そしてこれらたたかいはすべてが各国の左右の分解を促進している。

わが国では今春期、日帝の戦争準備にたいする人民の広範な危機感を背景にして、ミッドウェー横須賀寄港阻止闘争や総評をまきこんだ反安保闘争、さらに反核反原発のたたかいや高揚し、労働運動においては八一春闘が、いまだ部分的にではあるが中小労組の激しい闘争の噴出が存在した。ここでもまた社共は闘争を内部から腐らせる敵対者として登場しているのである。

帝国主義足下の階級闘争が直面する第一級の闘争課題は、自国帝国主義の侵略反革命戦争とファシズム準備にたいする正面対決であり、被抑圧民族人民のたたかいにたいする国際主義的連帯であり、そして社共・中間連合政府派にかわる前衛党の建設であることが、ますます鮮明になりつつある。こんにち帝国主義諸国においてさまざまに現出する諸事態のなかに、先進的プロレタリアートが見出さねばならない核心点は、まさにここにこそ存在しているのである。

労働者国家下の階級闘争

ボーランドに代表される労働者国家内のプロレタリアートのたたかいもまた、国際階級闘争の前進の重要な要素を構成している。昨年八月セレスト以来のボーランド労働者のたたかいは、社会帝国主義支配下の労働者国家の根深い経済的政治的危機の存在をあきらかにしただけではなく、労働者国家内のプロレタリアートの階級闘争の発生が不可避免であり、それはいくらかの経済的状態の改善や

は、全世界においてダイナミックな前進を刻印している。同時にそれは帝国主義との慾着か、社会主義への発展かをめぐる激しい闘争をその内部に生みだしており、この闘争を民族解放・社会主義の一貫した路線のもとへと発展させることは、現代革命の中心問題のひとつとなっている。

その典型は現下のイラン情勢に見出しうる。大統領バニサドルの追放と、これにたいする六・二八IRP(イスラム共和党)本部爆破をもつてするイランにおける内戦的状況への突入は、反パーレビ・反米をかかげたイラン民族解放闘争が、その内部から不可避の階級的分解を開始したことの衝擊的なあらわれであつた。七九年二月革命においてイスラムとホメイニを旗印にせざるをえなかつた石油産業労働者、都市下層労働者、貧農は、その後の地主と結合したIRPの土地改革の不徹底、離反し、武装を開始はじめた。それはイスラム僧侶と民族ブルジョアジーの双方に対決して、あくまで民族解放をおしすすめるこの模索であった。バニサドルに代表される民族ブルジョアジーの「近代化」派は、いまだ強固な階級的基盤をもたず、かかる労働者、インテリ部分との当面の共闘を選択した。IRP・イスラム支配層はこのようない部分、とりわけ社会主義革命へ進撃せんとする部分への集中砲火を浴びせつづけている。現在左派勢力は、IRPや「近代化」派の評価をめぐり、またソ連の評価、あるいは「いかなる社会主義をめざすのか」をめぐって分裂している。イランのプロレタリアートは、革命を民族ブルジョアジーの利害のもとにしばりつけられ、またソ連の評価、あるいは「いかなる社会主義をめざすのか」をめぐって分裂している。南朝鮮の地においても同様の事態は存在している。光州蜂起から一年を経て、南朝鮮階級闘争は反独裁民主化闘争の内部から、民族解放・社会主義を展望しその前衛党をかちとらんとする部分を生みだしつつある。「光州蜂起は失敗に帰したがそれは民族解放のための本格的な武装闘争にむかう出発点である」と宣言した地下出版物「光州市民蜂起白書」は、その一端をわれわれの前に開示してみせた。

政治支配の緩和によつて消滅するものではなく、社会主義の前進のための階級闘争として発展する以外におしとどめようのないものであることを、全世界にむかって力強く宣告するものであった。さる七月一八日、ボーランド統一労働者党臨時党大会は、深刻化する経済危機とソ連社帝の軍事的包囲の強化のなかで、第一書記に再選されたカニアの「中道改革路線」を採択して終了した。この大会の最大の特徴は「連帶」にしめされるボーランド労働者階級の力が、統一労働者党の内部にまでその影響をおよぼしたことにある。しかしこの影響力はいまだ自然成長的なものであり、過渡的なものである。ボーランド労働者のたたかいは、労働者国家における社会主義の前進をかけた党内闘争に目的意識的に転化されねばならない。それは労働組合でなうこととはできない。また官僚主義にたいする反対派にとどまることによつては、あるいは経済闘争、民主主義闘争の枠内にとどまることによつては、眞の勝利を獲得することはできない。全世界のプロレタリアートは、いまこそボーランド・プロレタリアートとともに、ソ連社帝の軍事侵攻策動、統一労働者党の弾圧を許さず、世界社会主義の前進をきりひらくレーニン第三インターを継承する革命的中核を本格的に建設していく道に、手をたずさえてふみだしていかねばならない。

これら帝国主義諸国、第三世界、労働者國家をつらぬく国際階級闘争の新たな胎動のただなかに、帝国主義打倒・社会帝国主義打倒・中国路線止揚の赤旗をうちたて、このもとに全世界のプロレタリアートの国際的結束を組織すること——これが現代に生きる革命的プロレタリアートの国際主義的責務である。それは全世界でたたかいとられるべきレーニン主義前衛党が立脚せねばならない路線的基础である。

われわれは今秋期闘争を、このような国際主義的任務をふまえつつ、自国帝国主義＝日本帝国主義打倒の正面戦としてたたかいねかねばならない。この正面戦にプロレタリア大衆を組織せんとするとき、社共＝中間連合政府派の政治的影響下から人民を解き放つていただたかいは決定的に重要である。日本階級闘争の基礎規定とともに、この点について以下ふれていく。

全面開花させる社共

八〇年代日本階級闘争における社共との党派闘争の重大性を強くプロレタリア大衆の内部に喚起せよ。あらゆる社共への屈服者、追従者を弾斥し、社共との真正面からの党派闘争に決起せよ。

排外主義的本質を

☆

☆

他帝国主義国に例をみない国内プロレタリアの強収奪を最大の条件にして、敗戦後、日本資本主義は急成長し、帝国主義として経済的政治的軍事的に国内外の人民の前に登場した。激化する帝国主義間抗争、市場再分割戦に直面する日帝は、六〇年代階級闘争をのりきるとともに、革命党建設の暴力的破壊、社共の体制内とりこみ、総評労働運動の体制内とりこみ、プロレタリア上層部の「中間階級意識」の育成を物質的条件とし、国際共産主義運動の権威の失墜を政治的条件として、急速度に戦時体制づくりをなそうとしている。それは、国民の帝国主義的排外主義のもとへの統合、プロレタリア大衆の強収奪、権利剝奪、侵略反革命戦争準備を主要な攻撃路とし、すすめられている。

民社党は、その労働運動支配とともに、この日帝の攻撃の階級先兵としてあり、階級内部分としてまだ存在する社会党は、その全体的性格として「社会主義」をおろし、人民との直接的結びつきを急速に切りすて、大労組労働貴族に階級基盤をおくブルジョア改良派へと転落するにいたつた。日共はレーニン主義のすべて、マルクス主義の戦闘的実践性を示す、古典的意味におけるカウツキーに代表される社民党派へと理論上も転落した。社共のもつ現実的階級性は、実態として巨大な労働組合をその支配下に存在させ、議会選挙において社共に票を投じるプロレタリア大衆の過半に、改良の期待を現にいだかせて、いること、およびブルジョア改良派、社会民主主義派としての「資本主義批判」「社会改良展望」の内実に、多数のプロレタリアーの期待をひきつけていること、これにある。

一方、プロレタリア人民の大衆的現状はつぎのようなものとしてある。その一面は、日本帝の超過利潤を経済的基礎にした「中間階級化」の攻撃を不斷にうけており、世界的視野のなかにおいては、被抑圧民族階級闘争にたいする敵対者として動員させられる危険にさらされつづけていることであり、そして他面において、資本主義の危機の中で社共にたいする階級的絶望が着実に増大し、広範な人民の階級闘争への参加はますます不可避になつていること、これである。

これらの傾向の指摘は、八〇年代をとおして存在するであろう日本階級闘争の状態の基礎規定である。この基礎規定をふまえるとき八〇年代日本階級闘争の攻防のなかに、社共との闘争の重大性をつきだしていくことが不可避となる。われわれは、以下のように社共との闘争の基軸を設定せねばならない。

その第一は、日帝の侵略反革命戦争にたいする態度をめぐる闘争である。社共は、「反戦平和」を口先ではかかげるが、その内実は自國帝国主義の超過利潤によつてはじめて保

障された小市民的生活状態の防衛であり、それは本質的に帝国主義が権益防衛の名のもとに人民を侵略反革命戦争へと動員しようとすることと矛盾しないのである。ますます巨大になっていくであろう戦争問題をめぐって生起する人民の流動の内部にわけ入り、社共との闘争を組織していくことは、ますます緊要な事業となるであろう。

第二の闘争は、「中間連合政府攻撃、ファシズム攻撃」をめぐる社共との闘争である。我が国の階級闘争の前進のための労働運動における対社共党派闘争を堅持しつつ、これと結合して、社共との社会主義をめぐるたかが組織されねばならない。そのたたかいがわが国にあつては「中間連合政府攻撃、ファシズム攻撃」との闘争である。その闘争の内実は鮮明に「資本主義の原則批判、社会主義の原則提示」である。

第三には、労働運動の産業報国会化攻撃を中心とする闘争である。これは社共をつらぬく反階級的攻撃と見るも、社共を同一レベルで批判するだけでは不十分となるであろう。すなわち工場労働者の経済的政治的自決起への弾圧にあらわれる帝国主義下での眞の意味での組合主義は、日共に左翼性を粋おわせることが可能にし、日共との闘争により重大性と困難性をもたらすであろうし、他方、当面する労働運動方針、闘争課題に関しては、社会党・民同との闘争の重要性が先行するであろう。われわれは、この社共の同質性と現実的相違をおさえたうえで、労働運動の階級的再編のための路線的要たる闘争として、労働運動における社共との闘争を前進させなければならない。

いまや社共はますます帝国主義的排外主義の沼地へところげおちている。日共が最近なりものいりで打ちだした「眞の平和綱領のために」は、激動の時代におけるプロレタリア階級闘争の不可避的激化のもとで、プロレタリア大衆を体制内改良と敗北の道へひきずりこむためのカウツキー主義のペテンである。カウツキー主義とは「マルクス主義のうちから、自由主義者に、ブルジョアジーに受け入れられるもの（中世的制度の批判、一般に資本主義の、とくに資本主義的民主主義の進歩的な歴史的役割）を取りあげ、ブルジョアジーに受けられないもの（ブルジョアジーにむけられたるプロレタリアートの革命的暴力）をマルクス主義のなかから取りのぞき、それについては沈黙し、それを「ごまかす」（レーニン）者である。

「眞の平和綱領のために」は、第一に「世界は戦争か平和かの歴史的岐路に立つてゐる。世界平和を擁護するうえで、一国の進路はその国の人民自身が決定するという民族自決の

権利を尊重することは、もっとも根本的な条件であり永続的な平和の基礎」と言う。

この日共の国際路線の犯罪性は、帝国主義戦争の到来する一時代に直面して、帝国主義、社会帝国主義打倒の国際的任務を否定し去るために、「民族自決の権利の尊重」を悪利用していることにある。したがって彼らの「民族自決」の主張とは、レーニン主義のそれとはまったく異なるものだということが見ぬかれねばならない。レーニン主義は、民族自決を抑圧民族プロレタリアートによる被抑圧民族プロレタリアートの階級闘争の前進への連帶、自國帝国主義のあらゆる民族的抑圧との闘争という見地から主張しつづけてきた。だが日共は、抑圧民族としての自己の民族主義を擁護するために、自己が抑圧民族に属していることを陰ペイし、また帝国主義の時代における抑圧民族と被抑圧民族との分裂を陰ペイし、「民族自決」を抑圧民族に適用することを強弁しているのだ。

第二に「日本がアメリカ帝国主義の戦争政策のアジアにおけるもともと重要な拠点とされ、その軍備拡張のもとも有力な同盟者とされつつある事態」という主張について。彼らは日本が帝国主義であり、日本ブルジョアジーの戦争準備が自國資本主義に経済的基礎をもつた帝国主義戦争準備であることを否定し、帝国主義の政治を帝国主義の経済から切り離し、米帝の圧力に屈服した一部支配層の政策問題に歪曲化している。それは帝国主義戦争にたいする帝国主義本国プロレタリアートの国際主義が、自國帝国主義の侵略反革命戦争との正面戦を欠いては空論であるとしたがつて第三に、「真の平和綱領のためには、「アメリカ帝国主義の『力の政策』、ソ連と中国の社会帝国主義的な誤った政策展開」に対決するというふれこみのもとで、公然と自國資本主義擁護の立場を主張するものである。

他方、社会党は、超過利潤を経済的基礎にした労働貴族の党、労働手代の党へと純化している。この間の「社会主義への道」をめぐる見直し論争は、この彼らの階級性をさまざまと示すものである。

昨年発表された「八〇年代の内外情勢の展望と社会党的路線」はその骨子を次のように提起している。第一に「国際関係の多極化構造に対応した眞の国益の追求」、第二に「産業構造の変化、労働者階級の階層化、要求の多様化に対応した、参加・介入と分権・自治による構造変革」、第三に「連合政権は、現代資本主義のメカニズムへの参加、介入を通じた民主的改革のための改革戦略を集約する政権である」、第四に「社会主義の枠組みは、現代社会の民主主義を基盤とし、生産と消費の意思決定、運営への労働者の参加にもとづく経済活動の計画化である」と。これは、自

国資本主義の危機の救済―帝国主義国家権力の「民主的改革」へとプロレタリア大衆をひきずり込む、危機の時代における帝国主義的排外主義であり、プロレタリアートの階級闘争の利益を、ブルジョアジーに自らの特権と引きかえに譲り渡す者である。

われわれは今秋期、社共・中間連合政府派との党派闘争を三つの基軸をもって開始していかねばならない。この闘争は長期にわたる事業であり、この点にわが国革命運動の焦点が確立されねばならない。

激化する日帝の戦争

☆ ☆

とファシズムの準備

「防衛力増強の声を通して消えたはずの軍靴のひびきが耳によみがえる」(朝日八月十五日)――商業新聞ですらこうのべたように第二次帝国主義戦争の終りから三六年をむかえた八一年秋、日本帝国主義はふたたび、みたび侵略反革命戦争の道へつきすすみはじめている。

八月十四日に閣議了承された八年度防衛白書は、日帝・鈴木政権がいま侵略反革命戦争への命がけの飛躍にふみだしたことを見明にした。ここ数年の防衛白書にくらべてきわだつた特徴はつぎの点にある。第一に国際情勢を米ソ緊張緩和から対立への移行ととらえて軍事力の増強を行なっていることはわが国の安全保障にとって潜在的脅威の増大となつてゐる」とし、「ソ連の脅威」が前面においていたものである。第三に軍備増強の前提として「陸・海・空の戦力で重要地域を占領された場合、産業基盤が破壊される場合、周辺の海空路が妨害される場合」の三つを有事として新たに想定していること。それは「限定的小規模な侵略への対処」をかけってきた「基盤防衛力構想」からの一挙的転換をめざすものであり、無制限の軍備増強に道をひらくとするものである。そして第四に眞の愛国心とは「國家危機の際に國を守る熱意」であり、守るべきは「國民に自由を与える國家体制」であるとして、教育内容にまで言及していること――以上である。

八一年度防衛白書にみられる日帝の急速な戦争準備、ファシズム準備の嵐に抗し、今秋期、これとの正面戦を実現していくためにわ

れわれは、①安保再編・軍備増強との闘争、②戦争への国民総動員体制の強化との闘争、③日帝・全斗煥体制、南朝鮮新植民地支配の強化との闘争、④右翼的労戦統一との闘争を軸に全人民的政治闘争の政治的攻防環をあきらかにしたい。

安保再編下での戦争準備

第一に安保再編・軍備増強について。

八一年五月の日米首脳会談は日米安保の新たな段階を画するものであった。対ソ対決をつづめ反帝民族解放闘争の軍事的封殺の策動をつぶやめる米帝・レーガンは、とりわけ中東・欧州方面を戦略的重心とする軍事力配置から生まれる北太平洋から東アジア一帯にいた地域の軍事力の低下を、日米防衛分担、すなわち日帝との軍事同盟関係の強化をもつて解決せんとし、他方、日帝はこの米帝世界戦略と結合しつつ独自の侵略反革命戦争体制の構築をねらい、この日米帝双方の思惑の所産として「日米同盟」をうたつた日米共同声明は存在したのである。日帝はこの基本戦略のもとで、米帝の側からの日米安保の片務性解消要求をうけいれ、日米安保の適用範囲、日米軍事分担範囲をなしくずしに拡大し、日米安保の即戦体制化、日帝独自の軍事力増強を策しているのである。今春のライシャワー発言や核どう載のミッドウェー横須賀強行寄港、さらに太平洋地域への戦域核兵器配備に関する日米協議の開始などにしめされる日米安保の核戦争体制としての強化、あるいは朝鮮半島有事を想定した極東有事の共同作戦研究にみられる日米共同作戦体制の強化など、安保再編・強化をめぐる動向は顕著なものがある。

これと連動し、かつてないテンポで自衛隊増強がすすめられている。八月十日防衛庁は護衛艦など十隻の艦艇、P3C対潜哨戒機十七機、F15戦闘機四三機、74式戦車八〇両などの導入を中心とする二兆五八〇二億円にのぼる八二年度防衛予算概算要求を決定した。それは他の部門の予算が前年度比伸び率ゼロを基本とするなかで、前年度比七・五%増となるだけではなく、後年度負担二兆二千億円(前年度比六八%増)を前提とする巨大な軍備増強予算となっている。防衛庁自身が「八年度以降の防衛費は前年度比十%以上の伸び率が必至」と公言するよう、日帝は「防衛費はGNP比一%以内」という制約をとりはらつて、五六中期業務見積り(八三・八七年度)による防衛計画大綱水準の早期達成をひとつのメドに、急ピッチで軍備増強をすすめんとしている。他方、三自衛隊共同作戦による対馬海峡の封鎖を想定した自衛隊はじまつて以来の大規模演習(七月二五日・二七日の実施など、安保再編とむすびついた自衛隊の実戦部隊化がすすめられている)。

進む国民総動員体制構築

第二に戦争への国民総動員体制の確立策動について。

日帝はいま天皇制イデオロギー攻撃を中心とした排外主義扇動をかつてなく強化している。鈴木政権は今夏「終戦記念日」には靖国神社への事実上の全閑僚の参拝を强行した。そして八月十五日を「戦没者追悼の日」とする方針を決定した。現在おこなわれている「戦没者追悼行事」は、北海道護国神社に例をとれば、自衛隊の北部方面総監が制服で参列し、侵略反革命戦争を偉業とたたえる祭詞をよみあげ、「靖国の神の歌」の合唱、「同期の桜」の踊り、軍艦旗を先頭にした音楽行進などをもりこんだりわめて反動的なものなのであるが、これを国家行事化し、より大規模におこなうことがもくろまれているのである。「戦没者追悼の日」の制定とは、第二次帝国主義戦争を賛美し、こんにちの戦争準備への国民統合をねらう攻撃である。それは靖国神社国家護持、天皇の靖国公式参拝の突破口をこじあけんとするものである。

これとともに、本年四月二三日の有事法制研究中間報告にしめされるように、有事体制準備が急速にすんでいる。また法相奥野は六月十九日、刑法改正草案を来春通常国会に提案すると表明した。保安处分の導入と、満期の出獄者や仮出獄期間を満了した者を監視する制度の新設を今後の主要検討事項とする。刑法改悪は、戦前の治安維持法下の予防拘禁制度の再現をも展望した階級闘争の激発にたいする予防反革命攻撃であり、ファシズム準備の一環に位置する攻撃である。

そしてこれらの攻撃をつらぬいて、戦争への国民総動員を策す決定的な攻撃として改憲がもくろまれている。昨年来、日帝II鈴木政権は、核武装合意論、海外派兵合意論など現行憲法の拡大解釈をふりまいて改憲への地ならしをおしそうめてきた。そして本年九月には、第九条の改悪、天皇の元首化、基本的人権の制限などを中心とする自民党憲法調査会改憲草案を発表するという重大な局面をむかえている。日帝は改憲攻撃をもつて戦後民主主義のもとで形成されてきた反戦平和意識を上から解体し、下からのファシズム社会運動を育成しつつ、ファシズムへの統治形態の転換を正面から準備し、戦争への人民動員をはからんとしているのである。

日韓体制の強化策す日帝

第三に日帝II全斗煥体制の強化、日帝の南朝鮮新植民地支配の強化について。

朝鮮半島から東アジア一帯を自己の権益圏として確保せんとする日帝にとって、南朝鮮の新植民地支配の強化はまさに死活をかけたものとして存在している。日帝II鈴木政権はオタワサミット以降「対韓外交を今後の外交の最重点に置く」と表明し、八月二〇日、二日に日韓外相会談を、九月十日、十一日に

日韓定期閑僚会議を開催し、さらに九月下旬から遅くとも来年一月までに日韓首脳会談を開催すると発表している。本年一月の金大中氏へのペテン的「減刑」措置以降、日帝によって公言された「日韓関係の修復」、すでに全面稼動はじめようとしている。日

帝II鈴木政権は今回の日韓三会談を前にして「対韓援助の性格をこれまでの『民生安定』から『安全保障』重視に切りかえる」と表明し、これをうけて全斗煥政権は日韓外相会談において「韓国は日本の安全保障のとりで」になっていることを理由に、六〇億ドルにのぼる対韓援助を要請した。

このように今回の日韓三会談は、安保・軍事を正面にすえた、かつてない反動的性格をおびたものである。その背景には朴をうわまるファシズム的独裁支配をもつてしても、絶望的危機が存在している。八〇年度において経済成長率マイナス五・七%、鉄物価上昇率四四・二%を記録した韓国経済の深刻な危機は泥沼化し、全斗煥政権は労働者人民へのいっそうの搾取・収奪をつよめるとともに、日米帝、とりわけ日帝へのいっそうの隸属の道を歩んでいる。またそうする以外には全斗煥の延命はありえない。しかしそれは南朝鮮人民の全斗煥政権への憎しみをさらによびさまざまにはおかないし、全斗煥政権と南朝鮮人民との非和解的対立はますます激化するであろう。

日韓三会談は、全斗煥政権の擁立強化をもって、南朝鮮人民に正面から敵対するものであり、またそれは日帝の朝鮮侵略反革命戦争、自衛隊朝鮮派兵に道をひらくものである。

産報への道=労戦右再編

第四に右翼的労戦統一について。

労働戦線の右翼的統一をめぐる攻防は、十二月「統一準備会」発足を焦点にしてきわめて重要な段階にさしかかっている。本年六月民間六単産からなる労働戦線統一推進会は「労働戦線統一の基本構想」に合意し、全国アピール「民間先行による労働戦線統一準備会への参加要請」を発表し、十二月統一準備会発足から八〇年代中期をメドにした新ナショナルセンターの結成へとつきすすもうとしている。「基本構想」は資本主義擁護、労資協調路線、反共主義を骨格とするものであり、「労働組合主義」「国際自由労連加盟」を踏み絵にして、一大反共労働運動の構築を展望して、総評への右からゆさぶりをしかけるところに大きな眼目がおかれていた。総評・民同は反自民、国民党闘争の評価など「五項目補強提案」をもって、この「基本構想」に一定の批判ボーズをしめした。しかし彼らの真意は「もはや反対とか拒否とかいえる段階ではない」とかく総評民間が全部そろって準備会に参加したい」(富塚)というところにあります。七月総評大会は意見の分裂のなかで統一準備会参加決定をなしえずにおわった。この事態にたいし富塚は「五項目は前提条件ではない。秋の総評大会では採決をもつても準備会参加を決定する」とのべ、あくまで右翼的労戦統一の道をつきすすむ強硬姿勢をしめしている。

労働運動の産業報国会化攻撃とこれをめぐる攻防の新しい段階が今秋はじまろうとしている。七〇年代をとおしてすすめられてきた右翼的労戦統一は、いよいよ総評労働運動の戦争とファシズムの社会的支柱へと化し、労働者大衆を侵略反革命戦争へと動員していくとしている。そのいきつく先は、日帝ブルジョアジーの意をうけた産業報国会への道、すなわち労働組合と労働運動そのものを日帝の戦争とファシズムの社会的支柱へと化し、最後的解体を直接に問題にする段階にいたるうとしている。そのいきつく先は、日帝ブルジョアジーの意をうけた産業報国会への道、すなわち労働組合と労働運動そのものを日帝の戦争とファシズムの社会的支柱へと化し、労働者大衆を侵略反革命戦争へと動員していく道につながっている。

われわれの任務 革命的政治闘争における組織せよ

前章までをもってわれわれは今秋期闘争をとりまく政治的状況について主要にふれてきた。最後にわれわれは秋期闘争をつらぬく先进的プロレタリアートの任務を提起することとしていた。

帝国主義の市場再分割戦の激化、日本帝国主義の侵略反革命戦争の前夜の時代にあって、プロレタリアートの政治決起はただひとつの反撃の鉄鎗である。あらゆる経済主義者の策謀をうちくだけ、レーニン主義に武装された革命的政治闘争の組織化をもって、この鉄鎗をうちきたえよ!

政治闘争を否定し、自国帝国主義を免罪し、プロレタリア階級を経済主義の沼地にひきいれんとする部分は論外とし、四トロに代表される市民主義的政治闘争、中核派に代表される反帝政治過程主義から、プロレタリアート

の決起を革命的に分岐させねばならない。

わが国の階級闘争、とりわけその政治的側面は、階級闘争を支配しつづけてきた社共のくびきに大きく影響されてきた。四トロ、そしてブンド党建設からの脱落分子、红旗・革命の旗などもはやすいようもなく社共に解体吸収された部分であり、中核派はその左足補完物である。

プロレタリアートはみずから政治決起をこの左右の日和見主義と峻別させなければならぬ。「革命の権力問題」「主要な党派闘争の問題」「階級諸闘争の牽引の問題」、そして「前衛党、革命の組織建設の問題」がいまや切りはなしやすく、政治決起とむすびつけて組織されねばならない。

組織すべき革命的政治闘争は、その政治目的をはっきりと自国帝国主義打倒・プロレタリア独裁政権の樹立に定められねばならない。革命的政治闘争はこの権力樹立をめぐる社共・中間連合政府派、右翼日和見主義との闘争に広範なプロレタリア大衆を組織する党派闘争として実践されねばならない。

組織すべき革命的政治闘争は、分断された階級諸階層、被抑圧人民の政治的経済的要求を、その自然発生性の根底から、われわれの「五つの大衆的政治スローガン」へと統合することをもって、自國帝国主義打倒のための広範な人民の政治的統一戦線へと領導する現下の革命的戦術として組織されねばならない。

そして最後に、これらすべての成果を革命的政治闘争はレーニン主義前衛党、その革命の組織の建設に直接的に結集させるプロレタリアートの目的意識として組織されねばならないのだ。

社共の本性を暴露せよ

組織すべき革命的政治闘争は、社共のくびきをうちくだくプロレタリアートのたたかいと結合して組織されねばならない。

すでにのべてきたように、社会党は日本帝国主義の擁護者、労働手代の集団である。日本共はいまや、いささかの留保もなくカウツキ・主義者である。そしてこの社共への屈服者として共産主義者同盟一分派を僭称し、これを右翼的に改編しようとする红旗・革命の旗グループが存在する。彼らの基本的性格は「民同補完物プラスプレハノフ主義」である。政治的には彼らは「自國帝国主義擁護・合法主義ゼネスト革命路線」すなわち中間連合政府派」となるであろう。これはうたがいよくもなくわが国革命運動、前衛党建設全般にとって許すべからざる阻害物である。

プロレタリアートはその武器をとぎすまし、階級闘争の前進のために、社共、そしてこれまでの屈服者とたたかひぬかねばならない。彼らが帝国主義の超過利潤を食らい巣くつている労働組合のただなかから、彼らの本性を暴露し、たたきだし、階級的労働運動の火の手

をあげねばならない。

このたたかいは嘗々たる堅忍不拔の革命的プロレタリアートの前衛的努力を必要とする。しかしこのたたかいをぬきにして、労働運動の右翼的再編を粉碎するプロレタリアートの新しい團結は組織できない。

われわれはこの面でのプロレタリアートの任務の緊要性を確信するがゆえに、ブンド内派のいくつかに存在する左翼小児病的傾向を批判する。それは労働運動に関して現象する左小病であるとともに、革命的政治闘争に関するレーニン主義上の弱点でもある。われわれは確信する。プロレタリア革命への現下の階級闘争は、先進的プロレタリアートの革命的政治闘争への決起と、階級的労働運動の構築への決起をますますよく要求している。この二つは切りはなすことのできない单一の任務である。

大衆的政治的統一戦線を

したがつてすべての先進的プロレタリアートは、つぎのようにその任務を設定しなければならない。

第一にブンド内政治共闘の前進のために原則的党派闘争を強化し、五つの大衆的政治スローガンを高くかげ、そのもとに広範な人民を結集せしめる革命的政治闘争を、公然と真正面から組織することである。

六〇年代末から七〇年代はじめにかけての日本階級闘争の敗北は、敵階級の手による大量の無党派主義を生みだした。それは社共にかわりうるレーニン主義前衛党建設の遅延の投影ではあるが、同時に、日帝の超過利潤に經濟的基盤を、自國帝擁護に政治的基礎を置く経済主義・排外主義をもつての帝国主義の階級攻撃であり、これに屈服しきれと結合して解党主義団が、ブンド党建設戦場に潜入せんとしていることが見ぬかれねばならない。だからブンド内政治共闘の原則的前進をなすよりも紅旗・革命の旗に代表される右派との厳格な闘争を、その革命的共闘建設の前提としなければならない。

ブンド内政治共闘の原則的前進をになわんとする先進的プロレタリアートは、まず何よりも紅旗・革命の旗に代表される右派との厳格な闘争を、その革命的共闘建設の前提としなければならない。

以上の今秋期闘争の基本任務をふまえ、十下の国際階級闘争の新しいねりのなかで、運動のあらゆる細流を、世界党・世界革命戦争・世界プロ独立へと、階級の要求のあらゆる分流を、日帝打倒・武装蜂起・プロレタリア独裁樹立へと統合するプロレタリアートの政治スローガンをうちきたえねばならない。それは分断された現下の階級闘争の自然発生的個別性を止揚するとともに、必要とされる政治過程上の課題スローガンとも区別された大衆的政治スローガンでなければならない。

任務の第二は、労働情報グループ内での階級的活動を強化し、決起のために結集した労働者大衆を「総評守れ運動」にとじこめ、お

しとどめんとする部分との闘争を組織し、総評・民同運動と階級的労働運動の大衆的分歧を組織することである。

われわれが左翼小児病とたたかい、労働運動の先進的プロレタリアートの活動の重要性を主張するのは、労働情報グループ内のぼう大な活性化するプロレタリア大衆の存在を重視するからである。

単に労働運動内部で活動するだけでは決定的に不足である。このような努力が日本労働運動を支配してきた労働貴族の延命に手をかすことになってしまふことは、わが国の労働運動が幾度もくり返し経験してきたところである。帝国主義ブルジョアジーにたいするたたかいと、労働貴族、経済主義者、右翼日和見主義へのたたかいは、しっかりと結合されねばならない。労働者の鉄錠を、帝国主義者のうちぶところにうちこみ、同時にこれを労働手代どもをたたきだす一撃とすべきなのである。

ブンド内における原則的党派闘争と結合した革新的政治闘争のための政治共闘の建設。労働運動、とりわけ労働情報内における経済主義・解党主義との闘争と結合した階級的労働運動の再建のたたかい。この二つの当面する実践をぬきにして自國帝国主義打倒にいたる広範な人民の政治的統一戦線を創出していくことはできない。みずから武装蜂起・プロレタリア独裁の組織・武装せる革命の司令部、武装せる革命の伝導路へと建設していくことはできないがゆえである。

全国のたたかう労働者人民諸君！

以上の今秋期闘争の基本任務をふまえ、十

・十三里塚現地闘争、十・二・一中央闘争を軸に、安保・改憲・日韓をめぐる攻防戦に勝利しぬき、九・十月闘争の一大高揚を実現しよう。

ともに決起せん。

購 読 料

- 10回分——二、〇〇〇円
- 郵送(密封)

10回分——三、〇〇〇円

20回分——五、〇〇〇円

購読料送り先

○郵便振替
大阪—63333高木一夫

○銀行口座
第一勧銀 高木一夫

515—1058150

烽火の定期購読を！

1981年9月15日

行委員長西岡氏から、
今大会は大阪十五教組
をはじめ、豊中市職労
豊中交通関係者などお
おくの労組の協力があ
つたことがまず報告さ
れ、大会の成功と「障
害者」解放闘争の前進
のために積極的な論議
をつくりだしていこう
という呼びかけがおこ

8・1～2

全障連大会に二五〇〇

第六回

大阪・豊中市

**”福祉切り捨てと戦争準備の攻撃
許さず、障害者の自立と解放を**

福祉切り捨てを公然とおしすすめようとするものにほかならない。これにたいして日共リ全障研ははじめとする多くの融和団体は政府側にとりこまれ、まつこうからたたかうことができず「いる」とのべ、国際障害者年を機に「障害者」解放の思想とたたかいを積極的に各方面に提起していくことをあきらかにした。また刑法改悪一保安処分新設策動にみられる権力の「障害者」差別攻撃がつよまるなかで、文化人・学者などが公然と優生思想を唱え、「障害者」抹殺を扇動する動きが台頭していくことに警戒を発し、差別排外主義とのたたかいの重要性を提起した。

側からのあいさつのあと、連帯アピールとして、障害者の生活保障を要求する連絡会議、国際障害者年中央対策委員会、全国精神病患者集団、赤堀政夫氏（メッセージ）、務局長は国際障害者年にふれ「政府のねらいは一方で国際障害者年を利用して障害者団体をとりこみなどの差言が、つぎつぎになされていった。

全障連大会が、たたかう「障害者」を先頭に全国から二五〇〇名を集めて、大阪・豊中市でたたかへられた。

一日目の午前中、全体集会であつて立った大会実

行委員長西岡氏から、

韓国人政治犯を救援する東京連絡会の連帯あいさつがおこなわれた。基調報告のあと決意表明に立った日韓定期閣僚会議粉碎首都実行委の友人は、「日韓三会談粉碎に向けて首都圏実行委を結成した。光州蜂起白書に示された南朝鮮人民のたたかいは反共民主化闘争の柱をうち破り、武装蜂起・社会主義革命をめざす階級闘争へ前進している。日帝・全斗煥体制打倒をかけ、南朝鮮人民に連帯する階級的たたかいを創りだそう」と力強く訴えた。そして、大芸大金学行委、大阪狭山・赤堀共闘(準)、横市大現朝研、明学大原理研一掃全学実行委・労闘・労活評などの決意表明がおこなわれた。なかでも、連帯のあいさつに立った日韓連帯京都七大学連絡会議のたたかう学友は、「昨年来の金大中氏救出運動の高揚が全斗煥の減刑措置

日韓外相会談粉碎全国実行委主催による日韓外相会談粉碎全国総決起集会がたたかぬかれた。司会あいさつにひきつづいて集会の最初に、南民戦救援会、在日

鉢木訓韓阻止。日韓首脳会談粉碎を準備せし。

8·20
► 9·9

日韓鬭争に連続決起

の進路を鮮明に提起した。そして集会後、虎ノ門までの戦闘的デモを貫徹した。



終日たたかひぬかれた日韓閣僚会議粉碎鬭争（9・9）

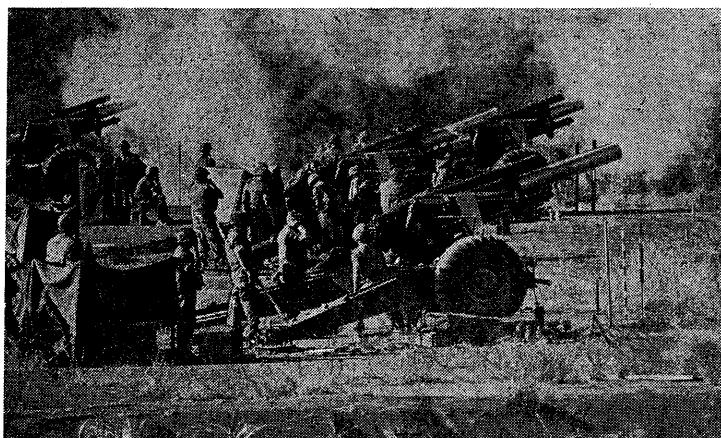
社共の排外主義的日韓鬭争や市民主義的日韓鬭争との大衆的分岐を創り出しえなかつたこととして主体的に総括されねばならない。五月日韓定期閣僚会談粉碎鬭争を白書に示される南朝鮮人民の前進に真に連帶する鬭争を創りだし、九月日韓定期閣僚会談粉碎鬭争を全国からの首都総決起をもつて共にたたかおう」と今秋季日韓鬱争

九·九闕集

●九・九鬪争
外相園田らが日韓定期閣僚會議に出席するためにソウルに飛び立つた九月九日、東京で定期閣僚會議粉碎をかけた二つの集会が連続的にうちぬかれた。
まず午後一時より、三河台公園で「日韓定期閣僚會議」粉碎！鈴木訪韓阻止！「日韓首脳會談」粉碎／全国実行委主催の集会が開催され、日韓統一京都学生実行委ら関東・関西の学生戦線をふくむ労学七〇名が、日韓外相会談粉碎闘争をうけつぐ戦闘的なたかいで貫徹した。つづいて午後六時より坂本町公園で、韓民統日本本部、日韓民衆連帶！首都圈緊急行動連絡会など三者共催の集会が、約六〇〇名を集めておこなわれた。日比谷までの戦闘的デモをたたかひぬいた全国実の部隊は、独自の隊列をもつてこれに合流した。
九・九鬪争は勝利的にうちぬかれた。さらに日韓首脳会談粉碎にむけ進撃しよう。

崩壊する「復帰」幻想、強化される軍事基地

鈴木を筆頭に政府閣僚が大挙来沖



中性子砲弾使用可能の155ミリ砲実弾演習

「復帰」10年を迎える沖縄

「復帰」10年の節目を日帝の側からきりひらこうとする一大政治攻撃が始まつた。今秋期、沖縄は鈴木を筆頭としたあいつぐ政府閣僚の来沖のなかで八二年をみすえた攻防の幕を開いた。

『鈴木の来沖』

八月二七日、大村防衛庁長官が来沖。「自衛隊・米軍基地視察」の一連の行動と発言は、日帝の沖縄基地再編・強化にかけるみなみならぬ希望を示した。大村は「ソ連軍の脅威」をくり返し強調するとともに、「わが国の安全保障上、沖縄の米軍基地は重要であり、安保条約の目的を達成するため引き続き米軍に施設・区域を提供することに変わりはない」「嘉手納司令部と日本が一致協力、両者の緊密化を図つていきたい」とのべ、姿である。「復帰」十年の現実のなかでゆれ動く沖縄を永久的に日米帝国主義の前線基地として固定し、反戦地主会を先頭に廣汎にわきおこる反戦反基地の声を絶望のなかにたたきこみ、徹底した排外主義宣伝によって侵略反革命戦争へとかりたること。これなしには延命しえぬことを知るゆえに、日帝はいま、全体重をかけて沖縄へ乗り込んでこようとしている。

『基地の増強』

日帝のこのいきどみを受けて沖縄基地の機能は飛躍的に強化され、その強化、中東へ向けた事前集積艦の母港化、さらに生活道路を封鎖しての喜瀬武原実弾演習は月一回

八二年にむけて、沖縄一「本土」をつらぬく沖縄闘争の爆発を準備しよう。

らに鈴木氏は、「障害者」への差別攻撃が、改憲策動や防衛予算の増大など戦争準備と一緒にものであることをあきらかにし、「いまこそ障害者自身の生存に関わる要求を組織し、自立と解放をかちとるため团结し、権力の攻撃を打ち破つていい」と呼びかけたのである。

その後大会は、生活・教育・労働・施設・赤堀・医療の六分科会の討論に移り二日午後まで熱心な討論がおこなわれた。最後に大会をしめくくる全体会では、赤堀闘争完全勝利、金井君・石川君の就学闘争勝利、刑法改悪・保安処分

新設阻止をはじめ、「障害者の自立と解放の旗を高々とかげ、福音切り捨てと戦争にむけた政策と放運動の体制内改良運動化の攻撃に抗し、これまでになら多くのたたかう「障害者」の結集のもとたかいとられた。日帝の戦争とアシズム準備が急速に進行するなかで、「障害者」の生活は日々破壊され、「障害者」への差別・抹殺の攻撃は強化されている。今回



の大会はこのような現実にたいする反撃であり、また試練にさらされる「障害者」解放運動の次の飛躍を問う大会としてあった。「障害者」の生活権・労働権・生存権をめぐるたかいを組織し、戦争とアシズム準備と対決する「障害者」解放運動の隊伍を、よりいふ強化せねばならない。

ベースを定着させるなど、増大し少はありえないという態度をはつきりとうちだしたのである。

これと前後して吉野防衛施設庁長官（九月八日）など、自民党や政府閣僚が次々と来沖し、さらに米軍関係としては、ドネリー在日米軍司令官（八月二十五日）、バローハ兵隊最高司令官（九月十一日）、その他多数の首脳陣の来沖があり、その他の攻撃はこれまでにない様相を呈してきている。

そして、これらの頂点に九月十四日、首相鈴木の来沖があるのだ。大村長官の発言にも見てとれるよう、くり返す基地被害、膨大な失業者など「基地沖縄」の矛盾は徹底して人民におしつけ、基地の維持強化は何が何でも強行する。

これが日帝の沖縄政策の一貫した姿である。「復帰」十年の現実のなかでゆれ動く沖縄を永久的に日米帝国主義の前線基地として固定し、反戦地主会を先頭に廣汎にわきおこる反戦反基地の声を絶望のなかにたたきこみ、徹底した排外主義宣伝によって侵略反革命戦争へとかりたること。これなしには延命しえぬことを知るゆえに、日帝はいま、全体重をかけて沖縄へ乗り込んでこようとしている。

日帝のこのいきどみを受けて沖縄基地の機能は飛躍的に強化され、その強化、中東へ向けた事前集積艦の母港化、さらに生活道路を封鎖しての喜瀬武原実弾演習は月一回

八二年にむけて、沖縄一「本土」をつらぬく沖縄闘争の爆発を準備しよう。

8・9

特別抗告審闘争の勝利を

八・七・九の狹山・反差別・人権・反戦平和週間の中軸として八月九日、日帝最高裁による狹山上告棄却四ヶ年糾弾のたたかいが全国各地で貫徹された。東京では日本教育会館に千百人を結集して中央討論集会が部落解

決意のシナブレヒコールで幕を閉じた。

ようと提起し、集会は再審実現の決意のシナブレヒコールで幕を閉じた。

を

を

を

を

を

を

を

を

を

を

を

を

を

を

を

を

を

を

を

を

を

を

を

を

を

を

を

を

全国各地で狹山統一行動

で狹山闘争の前進をかけ、①狹山闘争を日帝の戦争とファシズム準備と対決する全人民的政治闘争の拠点として強化し、②あらゆる職場・学園で狹山差別事件・裁判においても狹山講演集会が、約一千名が開催された。基調提起では反差別反権力共同闘争の組織的結集で開催された。報告に立った西岡中執は、反差別・反侵略・反権力の思想性を暴露し、③最高裁に必ずや特別抗告を受理させ、④部落解放闘争を日本階級闘争の革命的一翼へと拡大化し、⑤全国の先進的部落大衆・労働者隊列を再構築していくことが強く訴えられた。

全国闘争の一環として京都においても狹山講演集会が、約一千名が開催された。基調提起では反差別反権力共同闘争の組織的結集で開催された。報告に立った西岡中執は、反差別・反侵略・反権力の思想性を暴露し、③最高裁に必ずや特別抗告を受理させ、④部落解放闘争を日本階級闘争の革命的一翼へと拡大化し、⑤全国の先進的部落大衆・労働者隊列を再構築していくことが強く訴えられた。

再編期もかえた学生運動

八〇年代の飛躍と課題

全国の学生諸君！たたかう先進的学友諸君。八〇年代に入つてわが国学生運動は全般的に動期に突入している。そしてこの流動をめぐる右翼ファシズム勢力と社共・中間連合政府派との党派的攻防を熾烈化させている。日帝、当局による八〇年代学生支配の強化、右翼ファシズム勢力の攻撃のなかで、学生の自然発生的憤激が高まり、七九年四・二〇通達に反撃する全国学生集会、八〇年筑波大処分を焦点とし、八年日大対右翼闘争を焦点に学生の共同行動として展開されている。われわれはこの気運を学生の層的利益の自然成長性の範囲にゆだね、資本と権力の個別撃破の前に、再び六九年的敗北に甘んじて屈服してゆくのか、とか、それとも学生運動の内部から、その全体的着点を突破する運動と組織をつくりあげ、広範な学生大衆をけん引しうる八〇年代主体を、この流れのなかで創出してゆくのか、として問題は真正面から提起されている。

八〇年代、戦闘的大衆的学生運動の再生があたって、この戦後学生運動の直面した構造が大胆に変革され突破されねばならない。先進的学生はみずからを狭い層的利益のなかに固定してしまうことなく、広く全社会にたちむかって政治権力問題とプロレタリア階級闘争の道へとまっすぐに前進しつづけよう。革命的プロレタリアートとして生き、かつたかいつづけるための最初の決起が学生大衆のなかから組織されねばならない。

その時われわれは、学生の層的独立性の無

戦後学生運動の転換

戦後学生運動はいま大きな転換期に直面している。それは敵の攻撃の側から始まつた。

敵はいままで通りにはやってゆけなくなつた。

われわれもまたいままで通りにはやってゆけなくなつたのである。ではこの転換点は学生運動主体にとっていかなるものなのか。

戦後わが国学生運動は次のような時期に区

ある。先進的学生は、この内部にあつて文化的自治要求にたたかいを閉殺してブルジョア改良主義の補完者へと屈服させられてゆく危険性を克服し、学生大衆の深部から日帝の八〇年代学生支配への正面戦を組織していく任務をひきうけねばならない。

学生支配の

現段階

日帝の安保一改憲攻撃にみられるように八〇年代は、日帝が資本主義の延命の道を戦争とファシズム準備にもとめ、中間連合政府派をまきこみつつ、それへの国民総動員をなさんとする一時代である。

八〇年代学生支配の基本的性格は、七〇年代における大管法一中教審一筑波を路線とした学生支配の基本路線（それは六〇年代末学生運動の高揚に対する日帝の側からする総括として「学生＝過渡的存在」「管理され統制されるべき対象」と規定している。具体的には、機動隊一私服の恒常的学内導入体制、当局による活動家の権力への通報、家族への干渉、大学の移転、学部の統廃合、自治会活動の封殺、自主活動の圧迫などに鮮明である。）の推進のうえに、四・二〇通達による学生の政治活動に対する全面的な弾圧と、安保一改憲を軸とした侵略反革命とファシズムへの国民大動員を中心として、学生の政治的諸権利のハク奪、学生の第一次団結形態である学生自治会の破壊一御用化が、学生のたたかいとその組織の破壊・変質を狙って打ちおろされている。また、学生を排外主義へ組織するための教育再編が、大学の移転・統廃合を含めていよいよ強力に進められている。首都圏における筑波学園都市一鹿島臨海コンビナート一三里塚空港建設について、関西における侵略反革命一アジアにむけた出撃拠点・世界有数のシンクタンクとして関西学術研究都市構想を、関西新空港一大阪湾岸道路建設と結びついて打ち出していることの中に、それは明らかである。



これらは次の過程を通して打ち固められてきた。二二回中教審答申（①学生＝大学機関の利用者であり、管理と統制の対象 ②政治活動一政治的諸権利の警察力による規制をふくめたハク奪 ③処分をもつての大学の秩序

と機能の維持）のうえに、七一年二三回答申によつて、これまでの答申の集大成をはかり、七八年四・二〇通達（①学生の政治活動の全般的禁止 ②大学当局と警察との連絡の緊密化）を通して、八〇年代学生支配の基本骨格を確立した。その下で今日、①学生自治会破壊のための公認とりけし、予算凍結、暴力的

運動 ②大学の移転・統廃合・廃棄化 ③学則改悪、新規則導入による学生の自治会運動・自主活動の抑圧 ④学長への権力集中の下での、権力導入の常態化、ガードマン・右翼を動員した日常的監視体制などをより一層熾烈化しているのである。

この日帝一当局の学生支配をより一層直接的強力におし進めんとするのが、右翼＝反憲学連・原理研を筆頭としたこの間のファシズム学生運動の胎頭である。

この胎頭は、日帝一当局の学生支配の物理力として一面的にとらえるべきものではなく、学生内部における階級的利害対立の激化の直接的産物であり、それが政治的分裂にまで頭在化したものである。右翼ファシズム学生運動は、学生の将来のプロレタリアートに対する絶望を、排外主義の側から組織・糾合することによって、この間胎頭してきたことに着目しなければならない。

それは昨年十一月日大における「脅やかされる北の守り」上映を機とした右翼一反憲学連による文理学部の日常的武装制圧と、たたかう学友に対する学内からの暴力的排除、更には新歓期における学生大衆の独自の排外主義的組織化に見られるように、安保一改憲を焦點とした侵略反革命戦争への排外主義的動員と、反ソ反共をテコとした思想的組織化を目的とする反憲学連の「北方領土返還運動」・改憲運動や、国際勝共連合一原理研のスペイ防止法制定促進運動をおし進めるとともに、日帝一当局と一体となつた、たたかう部分に対する徹底した弾圧をおこない、学生の政治要求、経済的要求を大衆的闘争として組織することを一切認めず、自治会を学生支配道具にかえ、御用自治会化攻撃の尖兵としての役割をはたしているのだ。

問われる 路線闘争

今日の戦争とファシズムの到来の時代において、右翼一ファシズム勢力との正面対決を担い切るために、一方での社共、右翼日和見主義との首尾一貫した闘争の組織化が決定的に重要である。

中間連合政府派とその合流者達は、学生運動の分野においても、その反階級的役割を遺憾なく發揮している。これらとの対決を、学生大衆を前進させ、社会排外主義から武装させる路線的闘争として担い切らなければならぬ。

ない。

日本共産党的学生運動指導路線の本質は、第一に、今日の日帝の危機の深化一戦争とファシズムへの国民大動員に規定づけられた八〇年代学生支配の攻撃を、米日支配層の恣意的性格を隠蔽し、第二に、そうして学生大衆内部に激化する階級的利害対立の尖鋭化を、「学生運動とは民主的改良要求にすぎない」と否定し、戦後支配体制の制度上の改良の徹底化一民主的改良要求の組織化に学生大衆の決起を封じこめ、第三に、「全学協議会」路線に典型的な、今日の日帝ブルジョアジーの大學生支配に触れることのない分断された大学内における「自治権の制度的保障」一その運営機能形態へとたたかいを収約し、日帝の学生支配への憤激を骨抜きにし、御用自治会攻撃に武装解除せんとするものであり、第四に、「自由・繁栄・平和・民主主義」の中間連合政府という排外主義路線の下に、学生大衆を引き入れんとするものである。

彼らは今日、巧妙な御用自治会の扱い手として、先進的学生大衆に真向うから敵対し、学生支配の一翼として戦争とファシズムへの学生の組織化の道を掃き清めているのである。このようなか間連合政府派の、日帝の御用自治会攻撃のもう一方の柱としての純化に対し、大衆的な反抗・反撃が拡大している。この憤激を帝国主義・社会帝国主義への正面戦へ組織してゆくためには、たたかい内部に忍びこみ、中間連合政府派によつては収約しきれないので自然発生性を内側から変質せんとする右翼日和見主義との闘争が不可避である。

今日の日帝の攻撃を「弱体化した日本ブルジョアジーの延命策」という帝国主義の戦争準備への武装解除として主張する右翼日和見主義の頭目一四トロは、学生大衆のたたかいの中で、その権力問題に対する日和見主義の姿を遺憾なく発揮している。四トロは、今日の学生支配を、「改良主義一内ゲバ主義といふ学生大衆の主体の弱さに基礎をおいた学生運動の抑え込み」と規定する。それは第一に、六〇年代敗北の総括を権力問題への逢着と見えず、開始された激しい階級分解一政治分離が社帝に対する闘争をはじめとした党派闘争として噴出していることを真向うから否定するものであり、第二に、日帝の学生支配が学生運動の壊滅を通して、あらゆる領域における戦争とファシズムへの学生大衆の動員と組織化にその焦点をおいていることを隠蔽するものに他ならない。学生大衆への未だ分断された学生大衆の反抗の拡大そのものをさして「逆に、今や政府文部省の大学教育政策は破綻したと見るべきだ」などと、露骨な武装解除を呼びかけ、自然発生性を右翼的に固定化するのである。

社共一中間連合政府派との対決をかかる組合主義的市民主義的政治へと歪曲し、押しと

どめんとする右翼日和見主義と断固として闘争し、隊列内部から社共の補完物を一掃し、学園深部における帝・社帝との正面戦を切り拓こりではないか！

共闘と

統一戦線を

八〇年代、日本帝国主義の戦争とファシズム準備の嵐のもとで、わが国における大衆的流動が始まっている。右翼的労戦統一に反対し、総評労働運動の分解の中から噴出する戦闘的労働者のたたかい。反政府闘争の不抜の拠点へとさらに打ち固められている三里塚闘争など諸人民闘争の持続的高揚。光州蜂起連帶をかけた日韓連帯闘争。そして安保強化・軍備増強に反対する六月反戦反安保闘争の高揚。社共II中間連合政府派のなだれりつ屈服の対極に生みだされつつある広範な労働者人民の憤激の増大と戦闘的たたかいの噴出は、八〇年代の遅くない時期に、日帝の戦争とファシズム準備をめぐる国民的大流動の到来をわれわれに確信させるものである。この開始された一時代の中で、先進的学生は全世界の階級闘争に連帯し、自己をプロレタリア人民とともに、日帝の戦争とファシズム準備への正面戦へと決起させてゆかねばならない。そのためにこそ、広範な人民の政治的統一戦線の建設、その一環としての労働運動における統一戦線の建設を自己の任務といかねばならない。なぜなのか。この一時代において学生は将来のプロレタリアートとして資本主義的競争と階級的利害対立の渦の中に学生の時代から投げこまれ、戦争とファシズム準備への国民総動員を狙う八〇年代学生支配に直面している。今日の学生は階級闘争と無縁な所にいるわけでは決してない。プロレタリアートとして階級闘争に主体的に結集していくために、たたかう学生は、八〇年代学生支配とのたたかいと固く結びつけ、プロレタリアートの階級闘争の現状を直視し、その前進のために戦争とファシズム準備とたたかう広範な政治的統一戦線の建設を自己の任務としていかなければならぬ。

すでに前章で明らかにしてきた今日の学生運動自体の流動と転換期を、日帝の八〇年代戦略と真向から対決する運動と組織、その領導主体の建設へと再編してゆくために、今秋期闘争の渦中において、先進的学生は前記の立場をふまえ、自らの個別的闘争を次の二方向と結びつけたたかい抜かなければならぬ。

第一の方向は、五つの大衆的政治スローガンをかけ、広範な人民の政治的統一戦線の建設にたちあがることである。

(1) 帝国主義・社会帝国主義の侵略反革命戦争に反対しよう！

(2) 全世界の民族解放闘争、民族解放・社会主義勢力と連帯しよう！

(3) 自国帝国主義II日帝の戦争とファシズム準備とたたかおう！

(4) 労働運動の産業報国会化とたたかい、階級的労働運動を構築しよう！

(5) 社共II中間連合政府派の幻想を暴露し、大衆を社共のくびきから解き放とう！

このスローガンは、全ての先進的プロレタリアートがかけ、互いが互いを結合させ、個別性と部分性を被抑圧人民、プロレタリアートの階級闘争の全体的利益の下に統合していくためのものである。

八一年は、日帝の戦争とファシズム準備をめぐる国民的大流動が、その具体的姿を人民の社会生活の全ゆる側面においていよいよ顕在化させていく年となるであろう。我々はこれを発展させていくためのものである。

第三の方向は、日帝の八〇年代学生支配と右翼ファシズム勢力との二正面戦を学生大衆の深部からまきおこし、共同の反撃を組織していくことである。

今日の学生支配は、日帝の八〇年代戦略である侵略反革命戦争とファシズムへの人民動員・わが国階級闘争の排外主義的制圧のため、学生自治会を御用化し、一切の政治的諸権利を剥奪し、たたかいの組織そのものを根こそぎ解体、変質させようとする攻撃としてある。

たかまる学生の政治的経済的要求に根ざしつつ、右翼ファシズム勢力・中間連合政府派の自治会制圧の野望を打ち碎き、学生大衆のおもいきった起ちあがりを促進していかねばならない。

先進的学生は、今秋期打ちつづく日帝の攻撃・安保、日韓、改憲、産報化、学生支配強化、と対決し、以上三つのたたかいの方向を堅持、发展させ、学生運動の再編の巨大な奔流を創出せよ。全国のたたかう先進的学友諸君！ともに八〇年代階級闘争の新たな橋頭堡を創出するためには進撃しようではないか。

に対する政治的決起をたゆまず組織せよ！ 第二の方向は、階級闘争の基礎的戦場である労働運動において、産業報国会化攻撃と対決する真に大衆的で階級的な統一戦線を建設してゆくたたかいで、労働者人民と共にたちあがることである。

右翼的労戦統一のなだれうつ進行は、低賃金と労働強化・首切り攻撃に直面し、憤激を高める労働者大衆と既成労組指導部との間の矛盾を非和解的なものへと尖鋭化させずにはおかしい。八〇年代から八一年にかけて労働者大衆の怒りと注目すべき戦闘的たたかいが噴出してきている。これらのたたかいは、社共にかわる新たな労働運動の革命的指導部を形成し、階級的労働運動を創出していくことが、火急の課題となつていることを突き出している。先進的学生は、進行する産報化に抗する労働者大衆の憤激、先進的労働者の未だ分散的な闘争を統合し、階級的労働運動の奔流を作りだしていく任務をひきうけなければならない。

金と労働強化・首切り攻撃に直面し、憤激を高める労働者大衆と既成労組指導部との間の矛盾を非和解的なものへと尖鋭化させずにはおかしい。八〇年代から八一年にかけて労働者大衆の怒りと注目すべき戦闘的たたかいが噴出してきている。これらのたたかいは、社共にかわる新たな労働運動の革命的指導部を形成し、階級的労働運動を創出していくことが、火急の課題となつていることを突き出している。先進的学生は、進行する産報化に抗する労働者大衆の憤激、先進的労働者の未だ分散的な闘争を統合し、階級的労働運動の奔流を作りだしていく任務をひきうけなければならない。

烽火	
取り扱い店	
■北海道／ひらひら	■愛知／名古屋ウニタ ■京都／セイレイ社
■宮城／八重州書房	■東京／ウニタ書舗
吉祥寺ウニタ、コマバ書店、模索舎、明大生協	■大阪／大阪ウニタ、曾根崎書店、大阪市大
■神奈川／横浜ルビコン書房	■兵庫／神戸大生協
■福岡／九州大生協	■広島／広島ウニタ
■沖縄／高良書店	